岡三アセットマネジメント

人生100年時代の羅針盤

情報提供用資料

2019年8月19日

「積立投資」で乱気流相場でも着実に資産を積み上げ可能

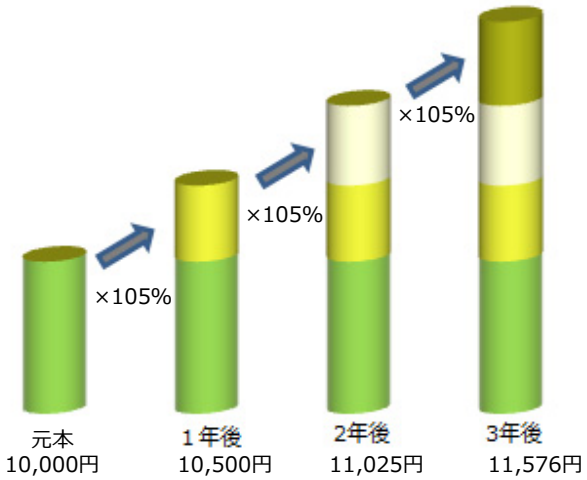
長期的な投資を続けていると、長距離の飛行と同様、途中で気流の悪いところを航行することもあります。乱気流のような相場でも不安にならずに投資を続けていくためには、毎月一定の額を積み立てることがシートベルトになりそうです。今回は、複利効果についておさらいするとともに、投資による果実を着実に再投資できる積立投資の魅力についてご案内します。

長期間の運用で得られる複利効果

これから資産形成を始めるという人は、まとまった金額を一度に投じるというよりも、毎月一定金額ずつ積み立てるケースが多いと思われます。それでも、投資期間が長くなれば複利効果により大きく育つ可能性があります。

図表１で複利効果についておさらいしましょう。10,000円を年率5%の利回りで運用すると、1年後には10,500円になります。これをそのまま再投資すれば、2年後に11,025円、3年後に11,576円となります。10,000円は10年後に1.6倍に、20年後に2.7倍、30年後に4.3倍に増えます。再投資すれば、長期にわたるほどリターンがリターンを生んで金額が膨れ上がるほか、積み立てなどにより新たな元本が投入されれば、そのペースは加速していくことがわかります。

図表1　複利効果のイメージ



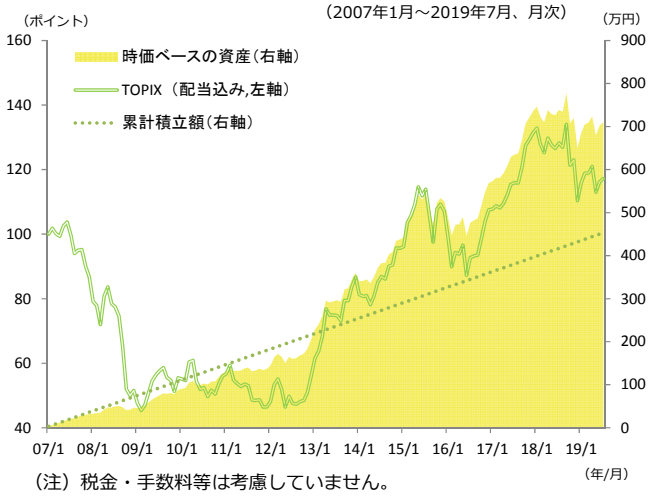
（注）税金・手数料等は考慮していません。

投資を続ける仕組みを利用

複利効果を得るためには、生み出されたリターンをそのまま再投資していけばよいことがわかりました。そこで、自動的に再投資される投資信託等の積立投資という仕組みを利用すれば、新たな元本を投入しながら複利効果を得ていくことが可能になります。

図表２は、リーマンショック前の2007年1月から2019年7月まで日本株の配当込み指数に連動する投資信託に毎月3万円の積立投資を行った場合のシミュレーションです。当期間における単純な積み立て合計金額は453万円ですが、時価ベースで資産は約710万円に成長しています。株価が高値圏で推移していた2007年に積み立てを開始し、何度か株安となった局面があったことで元本を割り込んだ時期もありますが、その後も投資を続けることで回復が可能になっています。

図表2　国内株式の長期積立シミュレーション



（注）税金・手数料等は考慮していません。

図表3

株式相場に影響した主なイベント	
2008年9月	リーマンショック
2011年3月	東日本大震災
2015年8月	チャイナショック
2018年2月,10月	米国発世界同時株安

<本資料に関してご留意いただきたい事項>

■本資料は、投資環境に関する情報提供を目的として岡三アセットマネジメント株式会社が作成したものであり、特定のファンドの投資勧誘を目的として作成したものではありません。■本資料に掲載されている市況見通し等は、本資料作成時点での当社の見解であり、将来予告なしに変更される場合があります。また、将来の運用成果を保証するものでもありません。■本資料は、当社が信頼できると判断した情報を基に作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■投資信託の取得の申込みに当たっては、投資信託説明書（交付目論見書）をお渡ししますので必ず内容をご確認のうえ、投資判断はお客様ご自身で行っていただきますようお願いします。

岡三アセットマネジメント

高値掴みを避け、安値拾いをしやすく

当シミュレーションのように、定期的に定額を積み立てる手法を定期定額投資、またはドルコスト平均法と言います。これにより、コストが平準化され、高値掴みを避け、安値拾いをしやすくなります（ドルコスト平均効果）。

積立投資は一度設定すれば、その後の市場環境がどうであれ、毎月一定の金額を自動で積み立てて投資に振り向けていきます。これによりドルコスト平均効果を得ることができます。

タイミングを見てまとまった金額を一度に投じる「一括投資」は一本調子で上昇する場面で効果的な運用ができるのに対して、定期定額投資は、価格が循環的に上下動を繰り返す局面で効力を発揮します。

ドルコスト平均法はリスクを低減するというよりは、投資する期間が長ければ長いほど、平均的な投資収益に近づいていくことになります。したがって、波乱相場でも投資機会を失うことなく着々と資産が積み上がっていくところにメリットがあります。

投資信託と相性の良い定期定額投資

積立投資には、定期的に同一金額を積み立てる定期定額投資のほかに定期的に同一口数を積み立てる定期定量投資という手法があります。

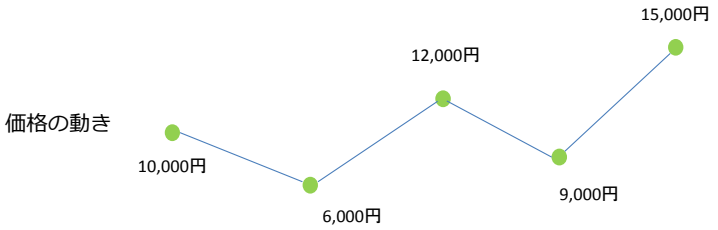
図表4は毎月10万円ずつ積み立てるケースと毎月10口ずつ投資していくケースのイメージです。定期定額投資では、価格が高いときに少ない数量を、安い時に多くの数量を買うことになりますので、トータルでの平均取得単価が下がります。したがって定期定額投資は投資信託と相性が良いと言えます。

長期投資がしやすい環境に

2018年から積立型の少額投資非課税制度（つみたてNISA）が創設され、個人型確定拠出年金（iDeCo）も対象が広がるなど、個人の資産形成を促す環境が整いつつあります。これらの動きに対応して、投資信託などの最低投資単位が引き下げられたほか、海外投資を含め保有コストの低い投資信託が増え始めています。

昨今、世界の金融市場は各国の金融政策や通商政策を巡る不透明感、地政学リスクなどで揺れ動いています。長期的な目線で積立投資を始める好機と捉えてみてはいかがでしょうか。

図表4　定期定額投資と定期定量投資



						合計	平均取得単価
定期定額	10口	16.6口	8.3口	11.1口	6.6口	52.6口	1口あたり
（円）	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	500,000	@9,505.7
定期定量	10口	10口	10口	10口	10口	50口	1口あたり
（円）	100,000	60,000	120,000	90,000	150,000	520,000	@10,400

結果的に多くの口数に低コストで投資することが可能に

（注）上記は定量購入と定額購入の一例です。税金・手数料等は考慮していません。

以上　（作成：投資情報部）

＜本資料に関してご留意いただきたい事項＞

■本資料は、投資環境に関する情報提供を目的として岡三アセットマネジメント株式会社が作成したものであり、特定のファンドの投資勧誘を目的として作成したものではありません。■本資料に掲載されている市況見通し等は、本資料作成時点での当社の見解であり、将来予告なしに変更される場合があります。また、将来の運用成果を保証するものでもありません。■本資料は、当社が信頼できると判断した情報を基に作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■投資信託の取得の申込みに当たっては、投資信託説明書（交付目論見書）をお渡ししますので必ず内容をご確認のうえ、投資判断はお客様ご自身で行っていただきますようお願いします。